

荷時に脳局所放射能分布がどのように変化するかを測定した結果、水負荷群では脳局所放射能が10%以上変動する症例は2例中2例で、釣藤散負荷群では4例中1例であった。

今回の実験における問題点として、放射性薬剤、被験者およびガンマカメラ等が考えられるが、中でもPAOの標識率の差、検査を受けるという感情的なものによって起こる脳局所血流差および画質の良悪が最も影響を及ぼしていると考えられる。

9. 瀰漫性肝疾患評価における肝シンチグラフィと肝胆道シンチグラフィの意義

油野 民雄 秀毛 範至 横山 邦彦
高山 輝彦 利波 紀久 久田 欣一
(金沢大・核)
鶴浦 雅志 小林 健一 (同・一内)

ほぼ同一時期に^{99m}Tc-colloidによる肝シンチグラフィと^{99m}Tc-diethyl IDAまたはPMTによる肝胆道シンチグラフィとが施行された瀰漫性肝疾患120例を対象として、肝障害の検出能、慢性化および重症度の評価に関して、両検査法の対比検討を行った。肝障害の検出能に関しては、慢性肝疾患では検出成績に有意の差異を示さなかったが、急性肝炎では肝胆道シンチの方がより高率に異常を検出し得た。慢性化の評価では、特に肝硬変の診断および慢性肝炎の活動性または非活動性の鑑別の点で、肝シンチが有用であった。重症度では、肝シンチよりも肝胆道シンチの方がより有意に評価し得た。

10. アルコール性肝障害の肝シンチグラムの検討

山本 和高 外山 貴士 杉本 勝也
石井 靖 (福井医大・放)

長期間にわたり多量の飲酒歴があり、臨床的にアルコール性肝障害と診断された症例に対しTc-99m phytateによる肝シンチグラムを実施し、肝内の放射能分布を検討した。また、一部の症例では、新しく開発された肝シンチグラム製剤、Tc-99m GSA (galactosyl serum albumin)でも検査を行った。31例中5例で、肝右葉前区域などに、不整な放射能の低下部がうかがわれたが、X線CT等では、それに一致するような異常所見は描出され

なかった。限局性脂肪浸潤の1例では、Tc-99m phytateを用いた肝SPECTで、X線CTでの脂肪沈着の部位にほぼ一致して放射能の増加を示したのに対して、Tc-99m GSAではむしろ逆の放射能分布が認められた。

11. 慢性肝疾患患者における有効肝血流量および肝内短絡血流量の測定

——^{99m}Tc-PMT SPECTを用いて——

岩佐 元雄 加藤 浩 鈴木 司郎
(三重大・三内)
中村 和義 松下 智人 中川 毅
(同・放)

SPECTによる^{99m}Tc-PMT静注後10分間のデータと1回の静脈血採血のデータを用いて、非侵襲的に有効肝血流量、肝内短絡血流量、肝内短絡率、全肝血流量を測定した。本法より求めた肝内短絡率とカテーター法より得られた肝内短絡率との間には良好な相関関係が認められた。肝硬変群の有効肝血流量は、健康者群と慢性肝炎群に対して有意に低値を示し、肝内短絡血流量、肝内短絡率は有意に高値を示した。全肝血流量は三群間で差がなかった。有効肝血流量、肝内短絡血流量、肝内短絡率は、肝疾患の重症度を反映する臨床検査値と有意な相関関係を示した。

12. ^{99m}Tc-DTPAによる移植腎機能評価の検討

駒井 哲之 中根 香織 伊藤 清信
外山 宏 藤原 道明 古賀 佑彦
(藤田保衛大・医・放)
竹内 昭 (同・衛・診放技)
星長 清隆 (同・医・泌尿器)

^{99m}Tc-DTPA腎摂取率から算出した腎糸球体濾過率(GFR)と腎血流評価法であるPerfusion indexを用い、移植腎機能の定量的評価の検討を行った。対象は、'91年2~8月に腎移植を行った6症例(すべて死体腎移植、男性3例、女性3例)、年齢は27~44歳(平均38.3歳)。検査前日に24時間Ccr値を測定し、比較を行った。GFRと24時間Ccr値は、 $r=0.674$ と比較的有意な正の相関を示した。Perfusion indexは、GFRや24時間Ccr値では変化を捕えられない移植腎が生着していない早期の急性腎不全の時期において、その予後判定に有用であった。